

岐阜支部

ちようちん

2013年8月号

全国障害者問題研究会岐阜支部 〒500-8879 岐阜市徹明通7-13 岐阜県教育会館401

TEL/Fax 058-253-7033 Email zenshouken_gifu@yahoo.co.jp

2013 全国大会 青森・弘前

中村進一

帰省ラッシュの大混雑の中、こだまを乗り継ぎ6時間以上かけて広島に行ったのは早いもので去年の話・・・今年はねぶた祭りが終わったばかりの青森での開催になった。前日の秋田での大雨の影響もあり、名古屋を20分遅れでの出発となった。飛行時間は70分、去年の経験があるだけにとても青森まで飛んできた実感はなかった。しかし、空港の外へ出ると湿気の少ない風と気温30℃の表示にとっても心地よい感じがした。

全体会場の青森県武道館まで直行バスに揺られて1時間。会場に着くと基調報告等がされる場所だった。この時点で1時半頃だった。いつものパターンだと現地到着後、昼食を済ませ記念講演が始まる頃に会場入りをしていたので、いつ昼ご飯の連絡が来てもいいように

携帯を手に持ったまま藤井さんの話を聞いていた(笑)。休憩時間になり会場内の食堂にてようやく昼食・・・時計の針は3時近かった。

弘前の夜は津軽三味線の生演奏を聴きながら美味しいお酒を呑むことができる『山唄』という場所だった。店の中を歩いていると「全障研の方ですか?」と声を掛けられ財布から会費を払おうとした時、さらに店の奥から手招きをする悦子先生の姿が



青森空港にて お出迎え

見えた。どうやら岐阜支部の他にも同じ店で交流会をしていた支部が2つ位あったようだ。歓談の途中、津軽三味線の音の良し悪しは革で決まるんです。と店員さんが教えてくれた。

9時を過ぎた頃ホテルに戻ったが、他の部屋の様子が気になり携帯を鳴らしてみる。電話の向こうの彼はコンビニで買い物をしていた。すでに同室の彼は疲れて寝てしまったと言う。そこで私の部屋で2人でよもやま話をしているうちに弘前の夜は更けていった。翌朝、私にとって最も苦手な時間と言っても良い《朝食バイキング》の時間である。朝一は身体が動かないうゑに季節もあって食欲が無い。それでも助けてくれる周囲のおかげで、朝食が摂れる。本当に有難い。感謝の一語に尽きる。

2日目の分科会は弘前大学を会場にして行われた。今回の岐阜支部からの大会参加には「2年後の岐阜大会への準備・学習のために・・・」という大きな目的もあった。飛行機の中でPR用の名刺も渡されていたので、私のサポートに付いてくれた方に一番最初に渡して『障がい者サポート』について色々聞かせてもらった。分科会はどんな様子か気になっていたので、特別分科会《なかまの分科会》に参加した。

調べてきた大会グッズの詳細、障がい者サポートの詳細については次回準備会にて。今回岐阜からの参加は10数名、来年の滋賀へは近い事もあり2倍、3倍どころか三桁の人数で出掛けて行きましょう！



←仲間の分科会

ピエロの舞台（保育）→



私と全障研

河合 泰邦 （自閉の小6男子の父親、障がい者支援施設 支援員）

事の始まりは、息子の発達の遅れなどが目立ち出した頃、入園したばかりの幼稚園を僅か3ヶ月でやめた事だった。まだ障がいを受容出来ていない状態であったが、子どもの辛さを思うと、とても通わせられなかった。

偶然、姉の知人が私設の幼稚園をやっているのを知り、通わせ始めた。そこでは、子どもの教育だけでなく、大人の自己啓発的な講座が頻繁に行われていた。親自身が変わることによって、子ども達はもっと大きく変わっていくことを知った。

僅か1年4か月通っただけだったが、多くの教育者などに出会った。鳥山敏子先生と宮沢賢治の思想。シュタイナー教育。竹内敏晴先生と言葉を使う事の難しさ。他にも多数の方から多くを学んだ。そんな中、ドイツのシュタイナー学校見学会に参加する機会を得て、障がい児を持つ家庭にホームステイをし、ドイツの子どもたち・大人たちとも出会えた。彼らの生活・価値観を知り、衝撃的だった。

帰国してすぐに洞戸の田舎に転居した。子どもを育てるのに良い環境と言うよりは、夫婦二人が自分らしく生きるために良い環境を選んだのだ。息子は洞戸保育園の年中の最後から入園し、3年ほど家族3人のんびりと暮らした。もっぱらネットで情報収集していた。めったに見ないテレビで、糸賀先生の思想に触れ感動した。

当事者の東田直樹さんのドキュメントを観て、書籍を何冊も読み感激してコンタクトをしたりもした。

経済的な危機がせまり、就活開始。しかし職は無く、途方に暮れた。気分転換に近くにある施設を見学に行くと、「お父さんお仕事は？」と尋ねられ、「就活中です。」と答えたら、採用されてしまった。成人の障がい者と接する事は、学びになると思い、自閉棟を希望した。

そのころには、一般社会の大人とは話題のずれた人間になっていた。教育・社会に疑問を感じずにはいられない毎日だった。

そんなある日、以前から息子の学校で性教育講座を開いていた渡辺武子先生の講座に出てみる事にした。そこでもらったチラシにあった岐大での性教育の公開授業に参加したのが全障研との出会いだった。洞戸に越して以来、共感できる教育者には、殆ど出会った事が無かった。土岐先生のお話には、とても共感させられたと同時に、自分達の子育てに自信が持てた。

入会后、お会いする先生方とお話しをさせていただくたびに、毎回共感させられたり、感動させられたりした。中でも近藤先生。あの本は、最高ですね。入会前に読んできた書籍の多くは、知識や手法ばかりが記されていましたが、先生の本では、子どもたちと先生の「生きた時間」が書き記されていますよね。子どもたち（障がい者）の前に立つ、立ち方に感動させられました。

また、東海ブロック研究会でお会いした、浜松の当時者グループの方達の笑いの渦に巻き込まれ、力を頂いたりもしました。全障研に入り、大きな力（仲間・理解者）を得た思いです。

不平等なこの世の中、親として支援員として、これからも戦っていきたくて考えています。

発見！“発達保障”～from Fresh Eyes～



☆5. 問題行動の意味を探る☆

若井 基一

前回に引き続き、今回もポップコーンの朗（あきら）さんに登場してもらって、「問題行動を発達要求としてとらえる」ことの意味を考えたいと思います。

《前回のふりかえり》

朗さんの「問題行動」は他の仲間をひっかいて傷を負わせる他害です。多いときでは、誰かの腕を傷つけることが4日連続になったこともありました。職員はその度に傷つけられた仲間の痛みを想い、その親さんに謝り、朗さんの親さんに報告しました。人を傷つけ、苦い思いをした朗さん本人はもちろんのこと、関係する人は毎回痛みを感じずにはいませんでした。

もちろん職員会ではこのことが何度も議題になりました。ただ、朗さんを他の仲間から離したり、別のグループで活動してもらったりというような対症療法的な対応をするのはまずい、と私は感じていました。そうすれば、職員は朗さんの表面的な問題行動をなくすことに終始するという、朗さんを管理するための存在になっていくのではないかと思ったためです。そこで、朗さんの「問題行動」を発達要求としてとらえてみようと思いました。

《発達検査を試みる》

いくつかの文献に学んでも、朗さんの発達要求が見えてこなかった私は、朗さんの発達検査を試みました（新版 K 式発達検査 2001）。そのとき朗さんは、課題がうまくできなかったときにやり方を変えてみる、というような気持ちの切り替えがずいぶんできていました。でも、それで完成する課題もあれば、完成までたどり着かないものもありました。また、課題に対してははじめは興味を持って取り組んでいても、検査者に同じことを繰り返す要求されると集中をきらしてその場から離れてしまう場面が多く見られました。検査の結果はおおよそ、1歳半の節目を乗り越えようとしている時期、というところでした。

《1歳半という時期と朗さん》

そこで、1歳半がどのような時期なのかを調べたところ(田中・田中 1982)、このころに特有の気になる行動が、朗さんにぴったりと当てはまることがわかりました。

つまり、それまでの「……ダ」「……ダ」と同じ行動を一方向的に強情に繰り返すときを越えて、この時期になると「……デハナイ……ダ」というように、気持ちの切り替えを行なったり、2つのものから迷いながら一方を選んだりすることができるようになるということです。また、「……デハナイ……ダ」という気持ちが芽生えているときに、「だめよ」とか「それはしません」とかいい続けるのは、支援者のほうから、直線的、1次元的な「……ダ」という対応がなされていることになる。仲間のほうは他者からの一方的なはたらきかけに対して「……デハナイ……ダ」と切り返して自分の思いを表現するときだから、全面抵抗になり、支援者のいう「だめよ」デハナイ……ダという行動になってしまう、ともありました。

他害をして注意された朗さんの心情を如実に表していると感じました。人を傷つけたときに職員から「それはだめです」と叱られると、必ずといっていいほど、むきになって仲間への他害を繰り返そうとする朗さんの姿が私の脳裏に浮かんだためです。

また、田中ら(1982)は以下のように述べています。人をかむことやひっかくことは、少々つたないけれども他者に気持ちを伝える手段の1つではないか、と。ある保育所の、1歳から1歳半の子どもたちのクラスでは、だれかがかむと、友だち同士伝染するようにかみ合ったりすることが問題になったそうです。しかし、そのクラスの子どもたちが3歳ごろになって、「ことばで友だちとかみ合える」ようになると、「口でかみつく」ことが減っていった、ということです。

朗さんがまわりの人が話すことばは理解できるのに自分はことばを発することができないことや、仲間をひっかいたときに気を張りつめてまわりの職員を意識することから、朗さんは仲間をひっかくことによって何かを表現しているのではないか、メッセージが込められているのではないか、と思いました。

《次回に向けて》

今回は紙面の関係で朗さんが他害をするときの気持ちを、文献を参考にしながら少しのぞくことしかできませんでした。しかし、今までの私から比べると、ずいぶん「発達要求としてとらえる」に近づいているのではないかと自負しています。

参考した文献には問題となる場面でどのように仲間に向き合うか、そのヒントもおおいに書かれていました。そして今、朗さんとの活動で試してみて、その手ごたえを確かに感じています。次回はその後の職員の対応や朗さんの様子を具体的に報告したいと考えています。

参考文献

田中昌人・田中杉恵（1982）『子どもの発達と診断 2 乳児期後半』pp.118-121、198-200
大月書店

はあー？～病弱養護学校物語～5

近藤博仁 作

西川先生

俺はどうしても筋ジスの病棟が落ち着く。学部制の前から筋ジスグループの俺には、子どもも看護婦さんもみんな馴染みになっていて、気をつかわなくてすむ。

子どもと何かするわけでもなく、ただ漫画を読んでいることもある。しかし、そうしてぼんやりしていると教材のヒントをもらうことも結構あるんだ。病棟のレクリエーションでやっている野球、サッカー、見てるだけでも面白い。

そういえば、俺たち若手が考えた教材をまとめて一冊の本にした人がいた。春田さん曰く、「汚い奴だ。全部自分で考えたような書き方だぜ。永井さんがその人に言われたそうだけど、出世するには自分でそうやって本を出すのと有利なんだってさ」ということだそう。

今年は親睦会の幹事が回ってきてしまった。それにしても夏の職員旅行は悲惨だったなあ。

バスに乗るとすぐに缶ビールを空ける音がした。皆さんご機嫌に始まった旅行だったが、悲劇は、旅館の前に、バスが止まった時から、始まった。

「なんやこれ」と一言、校長の声がした。同時に、不機嫌な様子でバスから降りる校長の姿があった。

そのちょっと前、バスが止まった時、その右手には豪勢なホテル風の温泉旅館があり、左手にはややうらぶれた民宿風の温泉旅館があった。誰もが右手へ行こうとバスを降り始めた瞬間、幹事長の森勝さんは、「こっち、こっち」と左手を指したのだった。これだけのことだった。けれど、校長の表情は一変してしまった。

しかし、それは前兆に過ぎなかった。宴会が始まり、年に一度の無礼講とみんながはしゃぐその中で、「俺の酌じゃ飲めねえのかよ」という声がする。よく見ると、ニコニコ笑った春田さんの横で事務の二人がいがみ合っているのだ。

「おめえ、さっき春田の酌で飲んでたじゃねえか」と堀尾さんが怒っている。どうも山道さんが堀尾さんの酌を断った後で、春田さんの酌を受けたようだ。

「まあ、まあ」と春田さんがなだめに入っているが、陰悪な様子はおさまりそうでなく、俺も間に入り、幹事の顔を立てて平静になるよう頼んだ。

何とか収めたその後は校長の宴会芸が始まる時間になった。この時間の設定が難しい。去年の忘年会で校長の出し物をプログラムのメインにしなかったら大目玉を食ったのだ。

今回の旅行はぬかりなく計画した。そして、出し物も分かっているのに・・・

「うへー」と職員のだよめきが起きた。

照明を落とした大宴会場の入り口右手に、女装をした校長が現れた。まさに現れたのである。分かっている空気も凍る。「ちょっとだけよ」の音楽に合わせて校長は踊り出す。控えめに女性職員のキャーという悲鳴が聞こえる。大げさに騒ぐと叱られるのだ。やりたい放題の校長芸。進む、進む。

春田の前に来た校長はポケットから女性用の下着を取り出すと、いきなり春田の頭にかぶせた。

「はあー？」

という春田さんの顔が見えた。何かにつけ校長と意見がぶつかる春田さんが気に入らないのだろうな。それにしてもこういう仕返しあり？

春田さんは、ピンクの下着を頭から取ると、口の字に並んだ膳の真ん中に投げつけ、黙って酒を飲み続けていた。俺は慌てて下着を取りに行った。これで、何事もなかったかのように宴会は進行していくのだろう。嫌な役割だ。

こうして、大荒れの職員旅行の夜は更けていった。

その一週間後、新学期準備で学校に行った後、柳ヶ瀬で春田さんと飲んだ。

「やってらんないですよ。校長のやりたい放題。森勝さんも最悪の旅行と言っていましたよ。そりゃそうですね。旅館の見た目が悪いからと言って、すぐに態度に出すってのは大人のやること？」

旅行の余韻が残る夏最後の飲み会、信じられない学校にいる情けなさで、俺は思わず泣けてきた。飲むしかない。食うしかない。そう思いながら、飲みかつ食った。牡蠣が、ちょっと変わった味だった。

「そうだよなあ。パンティだぜ、パンティ。あの人どこから手に入れたんだ」

春田さんは、投げ返した割には未練いっぱい表情で下着の入手先を気にしながら、季節外れの牡蠣鍋を食べていた。

その夜、俺たちは酒の香りも味も分からなくなるまで飲んで憂さを晴らし、新学期に備えた。

翌日、嘔吐と下痢に苦しむ俺の所に春田さんから電話があった。

「何時もの二日酔いと違うんだけど、西川くんは大丈夫？」

「俺もですよ。季節外れの牡蠣かなと思うのですが」

「牡蠣かー。これで休んだら夏期休暇なんちゃって」

教師がいなくても学校は動いていく。

中学三年生、聡志は、受験勉強の大詰めである二学期、元気に登校した。帰省しても喘息の発作はあまり起きなくなってきた。入院して六年目、長い道のりであったが、中学部卒業後の生活の見通しが立ってきた。家での生活に自信がつくと受験への気持ちも高まっていった。少なくとも周りにはそのように見えた。

この入院生活でぼくは身体を動かすことの気持ちよさをずっと味わってきた。机に向かったの勉強は苦手なことも分かった。でも、受験勉強はしないと高校に受からない。今のところ、受かりそうな所があるので良かったけれど。

ぼくより成績の良い美賢くんが長尾養護の高等部に行く。美賢くんなら進学校にも行けるのに。と思う一方で、羨ましいなと思うぼくもいる。ぼくたちあおばの生徒は長尾養護の高等部には行けない。あかしあの子たちだけが行ける。今の生活を余り変えなくても高校へ行けるといのがプレッシャー感じなくていいとも思うんだなあ。

出来ないこと考えても仕方ないか。

ヘルパーさんと作る

カンタン料理レシピ

④

こもり じゅんこ

子どもたちが幼い頃、夏になると、よく子どものお友達の家族とバーベキューをしました。親二人とも障害がある我が家では、アウトドアは自分たちだけではちょっと無理なので、いろんなご家族に誘ってもらって、本当にうれしかったです。色々な場面を思い出し、なつかしんでいます。そんなバーベキューにママ友が持って来てくれたおもしろいサラダを紹介します。

今回は、 **ポテトチップスサラダ**

=ヘルパーさんにやってもらうこと=

- ① ニンジンを2分の1本を細い千切りにする。
- ② きゅうり2本は、2ミリの厚さの斜め切りをし、それをたて半分に切る。
- ③ 玉ねぎ半分はうすくスライスして、しばらく空気にさらす。

=作り方=

- ④ レタス4～5枚は、適当な大きさにちぎって、水をよく切っておく。
- ⑤ ボールに①②③④を入れ、よく混ぜる。
- ⑥ 食べる直前に、⑤にポテトチップスをお好みの量（多くて2分の1袋くらい）入れて混ぜ、味ぽんかノンオイルの青じそドレッシングで味つけする。（ポテトチップスの塩分もあるので少なめに）

ポテトチップスは、厚めで、塩味など味のシンプルなものがいいです。生野菜の苦手な子どもも、ポテトチップスの味につられて、ついつい食べてしまう不思議なサラダです。

全国大会 in 岐阜 2015 第5回準備委員会のお知らせ

日時：2013年10月12日（土）15：00～18：00（終了予定）

場所：岐阜大学地域科学部5階 心理学実験室

内容：第1部 学習会 担当：若井基一さん（～16：00）

第2部 準備委員会 青森大会の報告

プレ企画の準備 他